

藤村のこと

瀬沼茂樹

藤村という作家は明治三十年代の中心的存在であつたし、大正から、この戦争の終る前、昭和十八年に亡くなるまで七十年間、文学に携わってきた人です。

今の人はあまり藤村をお読みにならないかもしれませんが、ほんの少し前までは非常に多くの人々、ことに女性に多く読まれていました。本当は藤村は女性をあまり書いてはいないんです。しかも、女性を書くことは大変下手です。それにもかかわらず女性が読んでいるということは、藤村の考え方の中心が女性の考え方に非常に近いものがある、といえるのではないのでしょうか。

藤村に入る人は、先ず大体詩集から入っていくと思う。藤村の詩集といえは明治三十年八月に出た「若菜集」、それから皆さんのよく知っている、千曲川旅情の詩の入っている「落梅集」が、彼の代表的詩集です。何故これにみんなが惹かれたか。皆さん方に関係のある恋愛詩が多く、この「愛」をうたった詩^{うた}に惹かれるのだと思う。藤村の恋愛詩の誘惑は

「遂げられない愛」なのですが、それがそくそくとして我々の心をうってくる。彼のことを使えば「若きころの一すじに慰めに泣いて詫びる一すじの恋」が書かれて、そこに真剣なもの、そして実現できない苦しみがあるときに我々の心を不思議にいざなうものがあるわけです。

彼は二十六歳のときにこの詩集を出して、新進詩人として世に出るわけですが、この詩集が当時として新鮮だったということは、それが時代とともに生きていくということ、そしてその中に「遂げられぬ愛」という、永遠の課題をもっているということだと思えます。

彼は非常にハイカラであつたわけですが、女性のスカート丈のような、うわっ面の流行を追っていたわけではなく、時代とともに生きながら、その時代のなから何か確実に前進して行くものをつかんでいたわけですよ。

「文学界」に集まってきた、彼の同僚の北村透谷、上田敏を除くあとの詩人や評論家たちは、だんだん大学の教授等に

なつて、創造的な仕事をしなくなるわけですが、彼はあくまでも時代とともに生きながら、時代を創り出す仕事をやってきた。そういう意味では一種のモラリスト、つまり人生の批評家、人間性の批評家といえるのではないかと思ひます。

もう一つ詩集だけで問題にしますと「藤村調」があるわけです。「藤村調」というのは彼の文体の特色をいったわけですが、簡単な例で分析しますと「破戒」の中に「月は空にあつた。」(The moon was in the sky.)という表現があります。これは散文調、つまり英文の直訳ですね。普通なら「月は空にかかつている。」とか、「月は中空にある。」とか、もっと日本的な表現があるわけです。「月は空にあつた。」という表現のしかたは、藤村が創つたから皆さんが使っているものであつて、当時としては非常に新しいものでした。彼が苦心したこの新しい表現は、それまでの表現のしかたを破つて新味を出すと同時に何か一種の重さを加えているのです。そこに彼の文体の「藤村調」と呼ばれる、ある種の特異なものがあるわけです。

「若菜集」の最初に六人の処女のうたがありますが、一番最初が「おさよ」の「潮さみしき荒磯の／＼巖陰我は生れけり」といううたです。これは日本語の文章の並べ方ではないわけですね、これも英文の表現からきているわけで、「我は潮さみしき荒磯の巖かげ(に)生れけり」という表現をひっくり返してそこにある意味を含める、何か重々しい感じを持

つとか暗示を与える、そういうことばの中に一つの魔術のようなものを持たせており、これが読むものをとらえるわけですね。このように暗示的なおももち、暗いけれども何か重大な意味の入っている、そんな文体におのずから我々はひきこまれていくわけです。

しかし、我々が藤村に心をひかれるというのにはもっといろいろなことがあるのでしようが、多くの人たちが意識的に、あるいは無意識的に心をひかれる文学の根本にあるものは何なのかということですね。これが、詩なり小説なり彼の作品の内容をつきつめて考えていきますと、案外平凡なんです。つまりごく普通の日本人が、近代の日本の生活の中で生き、愛し、死ぬる悲しみをうたっている。平凡な人間が平凡に生きていくことなのです。「生き、愛し、死ぬる悲しみ」ということばは、モーパッサンのことばなのですが藤村の「家」の中に出てきますし、又「新片町より」という随筆の序文にもうかゞわれます。

「家」を読んでいきますと、柳田国男と思われる人物が「人間はつまらないなあ、どうせ生きて愛して死んでいく一生じゃないか。そういう悲しみをうたとするのは、実際人間生き甲斐がないよ。」こんなことを言つたということができます。そういうことが柳田さんが文学を捨てて、民俗学に走つた原因かもしれないのです。

とにかく、平凡な生活、平凡な人たちのごくあたり前の生

き方を書いていながら、それが他の作家たちと違っている点があるとすれば、やや深くつかんで書いていることです。藤村の作品はほとんどが自叙伝的なもので、自分のことか自分の身のまわりのこと、そしてそれもあまり楽しい事ではなく陰惨な、狭い生活の実情しか書いていません。しかもそれらが読まれるのは何故か、今でこそ日本は天国みたいになつていくようですが、当時の日本は近代化の進むなかで、ある程度生活は向上したものの、家族関係はまだまだ陰湿な、封建的なものでした。従つて花袋だつて、秋声だつて同じように自分のまわりのじめじめした暗い生活を書いているわけです。そこで同じようなことを書きながら、何故藤村のものが読まれるかという問題が出てくるわけですね。

藤村が他のいわゆる時代作家と違う点は、作家という生活に即しながらもなおその中から、もう少し人生の根本に触れた問題を意識的に取りあげ、狭いながらも深くえぐることによつて我々日本人の精神のどこかにあるものをつかみだして書いているということではないでしょうか。「私小説家」というのは、みな作家という特殊な、いっぽう変つた連中の生活を書いている。それが何故読まれるのかという点と、その中に普通の日本人の考え方や生活のしかた、感じ方があるからなんです。藤村の場合は、いわば日本人の庶民の精髓のようなものを一方的に代表しているんじゃないか、ということと、そしてそのことはまた、藤村の覚悟でもあつたわけ

です。「新片町より」の序文に「我々は人としてこの世に生まれてきたものである。ある専門家として生まれてきたものではない。文学の道もまずここから出発しなければならぬ。」とある。つまり小説家という専門家である前に、ごく普通の平凡な人間として自己を意識し、そういう生活者であるという覚悟をもって、作家になつた。こういう意識は、他の自然主義作家にも無くはなかつたんですが、藤村は意識的に努力してやっているわけです。狭い生活、あるいは作家の生活を書きながら、単に身の生活を書くことではなくて、自分の問題意識のようなものをもって書いているということがわかるわけです。

たとえば「春」「家」「新生」「夜明け前」というような代表的長編小説をとつて考えると、それらは普通の意味の「自伝小説」でもなければ、普通の意味の「私小説」でもないわけです。必ずそこには日本の生活に即して解決していかねばならない問題が取り上げられ、考えられているのです。

西丸四方さいまるさんは信州大学医学部の教授ですが、この人は藤村の兄の娘である西丸小園しゅうえん女士の長男です。次男が元の東京医科歯科大学の教授だつた島崎敏樹さんです。二人とも精神病理学者ですが、西丸四方さんや、パトロジー精神病理学者達が藤村を分析した結果、分裂性気質を持っているんじゃないかと診断しているのです。人間は、外向的気質の、ほがらかな楽天的な人間と、内向的気質の内気な陰気な人間とが

あるわけですね。心理学的に内向的気質の人には精神分裂性気質が多いわけです。いつも考えこんでいて、時々突飛なことをやる。実際藤村は突飛なことをやっているわけです。明治三十年、東北学院大の先生を一年間やって、「若菜集」を出すと同時に東京へ帰ってきて急に音楽学校のピアノ科に入った。人から見れば突飛だが、しかし本人は自分の詩がいつまでたっても七・五調で、音律の変化がないので、音楽を勉強することによって自分の詩の革新をはかろうという理屈があるわけです。分裂性要素があるには違いないんですけどもそれよりも、どこにその人の文学的な情熱の根源があるか、ということの方が問題なんです。藤村文学を知る上で、ある一つのものにこだわっていく、あるいは突拍子もないことをやる、そういう内向的気質が出てくる何かがあることが、彼の文学的な情熱、エネルギーの存在の場所を明らかにするという意味で大事だと思っただけです。

我々平凡な人間は、日常生活の中で日常意識にうずもれて気のつかないことがたくさんあります。日常性にとらわれて見えなくなるものが、精神分裂的な要素のある人には、意識の断絶している間から見える。そこで人間の中にあるなにか不可解なものが見つみ出されてくるわけです。

大体、この頃の小説がつまらないというのはみんな作家が平均的サラリーマンになってしまっていることにある。そういう作家の書くものがつまらないというのは、普通の人間が

普通に考えているからなんです。少し特殊な心のかたむきをもっている人たちは、日常性の奥にある不可解なものを取りだし、普通の人間が見逃しているかもしれないものを引き出してくる、そういう力を持っているということですね。そこに大事な点があるのです。

花袋という人はごく普通の人間で、その才能も藤村とは比較にならないと思うが、十歳の時親を失くしてから非常に努力して明治四十年代の自然主義が盛んな頃には、今という文壇の大御所になった。自然主義といえば藤村よりも花袋が上だ、といわれるまでに自分を築きあげた花袋という人を、ぼくは尊敬しますし、又それは大事なことだと思っただけですが、やはり花袋の小説はあまり残らない、あるいは読まれる作品が決まっている。藤村のように全作品が、詩が読まれているということはどういうことかといえますと、実は日常意識におおわれている奥底にある非日常的なものをつかまえたからだと思っただけです。

藤村のものの考え方を知りたいと思えば「新生」という小説をお読みになるのが一番良いと思うんです。これは藤村が姪と関係をもってしまい、フランスに逃げなくてはならなくなった、一種の異様な体験です。このようなことは昔のように大家族制度の中では、しばしばありがちなことでしたが、彼は非常に自分に厳しく、道徳的といっているように自分というものを抑えて暮らしてきました。そういうふうな、自分

の生活を厳しく鍛えている時にちょうど男の厄年、四十歳になりました。厳しくやってくればくるほど逆に生活の罫に陥るといふ危険があるわけです。実際藤村はここで生活の罫に陥ってしまいました。ただ問題は、藤村がここに極めて大胆に「新生」といふ小説を書いて告白したことです。この場合、いろんな問題が出てきます。姪との間に子供ができるわけですが、その処置のしかたが極めて日本人的で、ここに藤村の考え方が平凡な日本人であるということがあらわれている。彼は姪のことは姪のお父さんにすべて一任して、フランスへ逃亡してしまうのです。彼を糾弾することはやさしいことですが、しかし、そういうことをしなければならぬ、あるいはするということはどこにあるのか。それは日本人の考え方への根本にあるのではないのでしょうか。

我々日本人の周囲をごらん下さい。何か悪いことがあると「人の噂も七十五日。七十五日経ってしまえば物事は片づいてしまう。」と思っっている。いや実は表面的に片づくように見えるのであるが。時間とは便利なもので、時が経つことによつて心で感情的にものごとを処理してしまふ。これは藤村だけがやっているのではなく、おそらく日本人の持っている常ではないかと思う。藤村にとつて歲月というのは、忘れる時間だったわけです、ちょっとしゃれて言えば「歲月は忘却の時間である。」とでもなりませうか、しかし、それと同時にその歲月の間、いろいろと自分のしたことを反省している。その反省のしかたですが、草食動物である「牛」は反芻

しますね。日本人が草食動物だからというわけではないんですが、藤村の特色もこの「反芻」なんです。つまり自分を忘れてしまふけれども又、くしゃくしゃとかむ。そして心の傷が時間の中で自然に治る、あるいは時間が我々の苦しいことを救ってくれることを望んでいる。と同時に、世間の体裁ばかりを考えている。世間のことを考えながら歲月をごまかし、歲月がたつ間に都合良く忘れ、その間に自然に心を直そうとする、我々の肉体が自然治癒力を持っているのと同じように、精神の自然治癒力にたよっている。こういう考え方をしていれば、人間は生物学的に成長はしますが、発展はないわけです。ごらん下さい、藤村の小説は植物的に成長しているけれども、発展しているわけじゃない。つまり論理的に考えるということは一度断ち切つて、弁証法的にいうなら、連続を切つて非連続にし、そこで別に新しい立場をつくらうとする。こういうことはおそらく日本人の中に、ある一種の仏教的というか、東洋的な、この世とあの世はつながっているという考え方があって、西洋人のように分断して考えようとならないところにおこつてくる。そして世間のことを気にして体面が悪いとか、体裁がいいとかいい、形式的なおじぎばかりしていてその中に巧みに自分を温存していこうとするところがある。

藤村は植物的には成長するけれども、物事をきちょう面に刻んでやっついていかないんじゃないか、あるいは飛躍することがないんじゃないか、ということがいわれる。

漱石の場合は循環的、論理的の一つずつ上がっていくので、問題は非常に鋭く、深い。彼は大変知性的な男であり、物事を論理で考える、論理で承知しなけりゃ、物事を承知しない男なんです。それに対して藤村は、時間というものをおかかれみのようにして暮らしている。これは普通の日本人の暮らし方なんです。

例えば藤村の文学には「漂泊」という観念がありますね。

関西へ、東北へと何度も漂泊の旅に出ています。フランスへ行ったのも漂泊の旅といえるでしょう。この漂泊の概念は、もちろん日本の芭蕉などにつながる旅の概念と結びつきます。外国の同じような漂泊を書いているものを見ますと、そこには「青花」に代表されるような一つの理想があるわけです。又、ゲーテの場合のように職業が人間を育てる、つまり食べるためじゃなく人間を完成させるために職業を持つという、一つの理想があります。とにかく無限なものを求めるか、完全なものになるかとするか、どちらかの目的を持っているという特色があります。ところが藤村は「若菜集」の中でも「草枕」という長い詩で「人生は旅だ」という、いわゆる東洋的な考え方をあらわしています。なぜ漂泊という概念がありながら、外国のような修業にならずに、単なる旅から旅への連続で、その日その日を暮らしていくということになるかという問題がありますね。

彼は他の人みたいに小説を書きっぱなしじゃないんです。大正の半ばと、昭和の二度、自分で自分の小説をきれいに整理しています。整理期間をおくということ、自分で反芻する時間をおいていることですね。つまり生活を何度もかみしめるわけです。そういうふうな藤村は自分で自分を大事にする作家だったわけです。又彼は警句を創ることの好きな人間で、「青年は青年の書を読むべし」とか「初恋思うべし」とか「心を起こそうと思えば身を起こすべし」とかそのまま聞けば実に平凡な、たあいのないようなマキシムをたくさん創っています。しかしこれは皆、自分の体験によって裏づけられているのです。たとえば彼の友人がどんだん詩を書きだし、自分はちっとも書けないで困っていた時があった。その頃彼は芭蕉とか西行とか李白など、老人っぽいものばかり読んでいたのだが、そこで気を変えて仙台へ行ったら、ハイネやゲーテのような若々しいものを読んだ。そうしたら詩が書けた、ということがあった。こういう事実をふまえた「青年は青年の書を読むべし」という格言に、自分の人生を処して行く処世訓を得たということですね、藤村はそういうふうにして自分を整理しながら、常にそこから何か自分の教訓を引き出し、そして新しくしようと努め、ごく普通の人間として藤村を考えることでいっそう親しみをもち、よく読んで、みなさんの生活の糧にしていただきたいと思いません。平凡なことに真理がありますが、単に平凡なことではなく、「生」の根源に関係しているところを発見していただきたいと思えます。(立正文芸学会での講演より筆記・阪田芳江、木村まき)